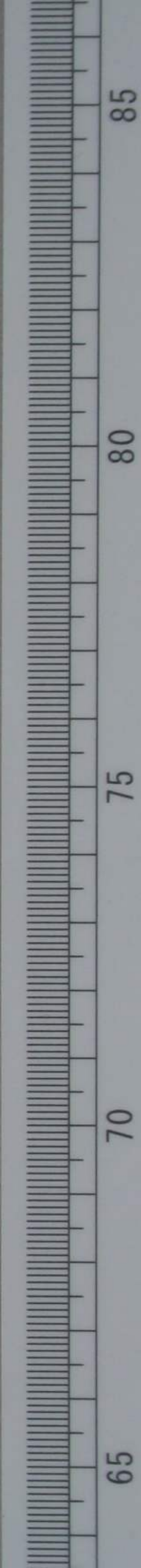


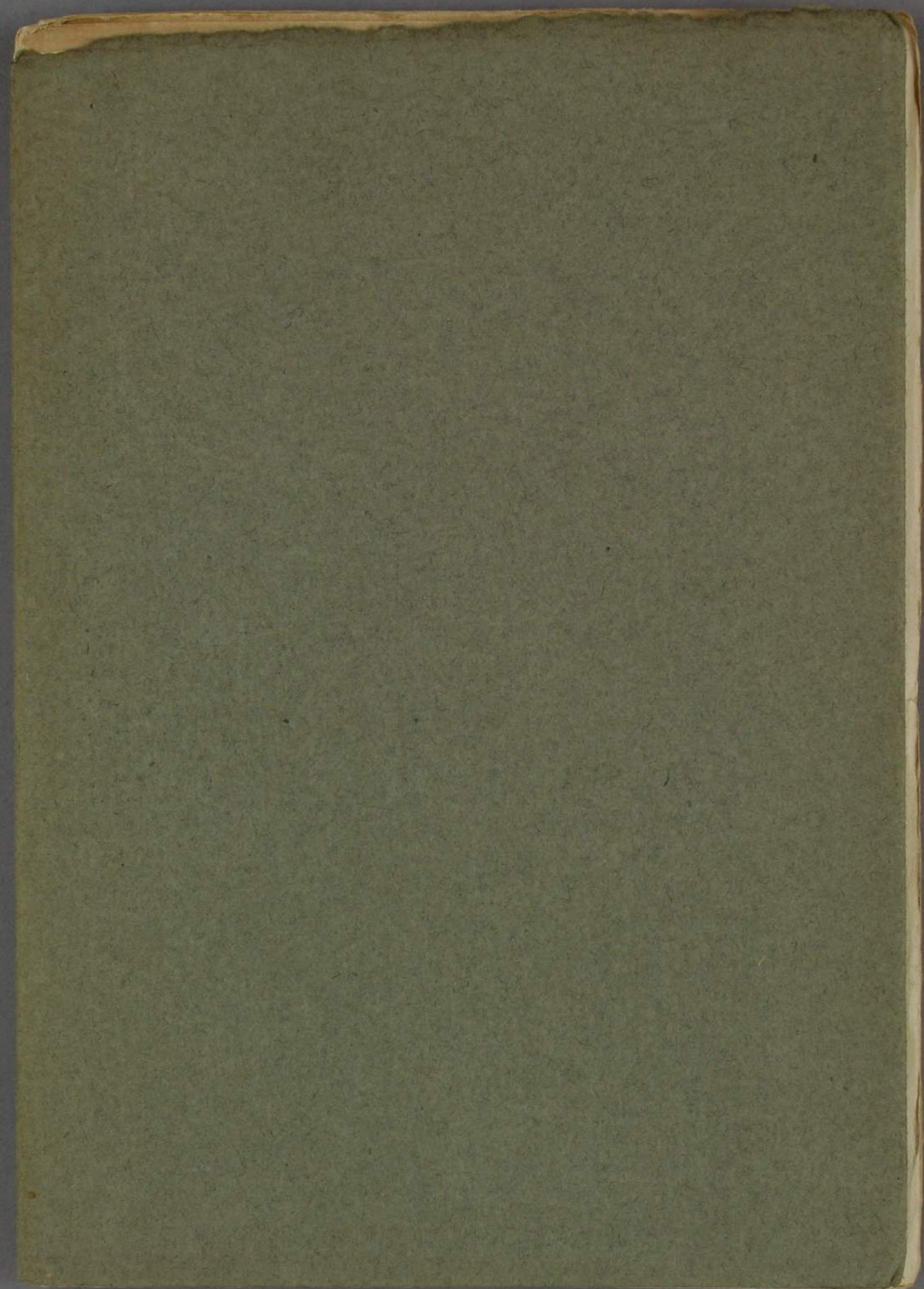


詩集
二足獣の歌へる
松本淳三著



詩集二足獸の歌へる

松本淳三著



處女詩集

二足獣の歌へる



松本淳三著

二足踏の歌へる

この處女詩集を、三十年前、癡狂すると同時に家出し、其後音として行方を
しらさぬ、當時の若き騎兵少尉の、まだ見ぬ父なる人に捧げる。

著 者

るへるの歌へる



序

私はこの作者の詩稿を読みはじめ前の、寧ろ沈黙になり勝ちな
三十分間ばかりの差し向ひに於て、既に、彼が十二分に詩人である
ことを直観した。

けに彼の詩は最も悪い場合に於てさへも、かの自分自身より以上
のものを作り出さうとするやうな、藝術を偽造し、贋造しようとする
やうな、似而非詩人通有の非望らしいものを、鶉の毛ほども曝露
してゐないのである。その詩のひとつひとつが其の折々の、彼の生

活をその儘の延長なのである。

どんなに露骨な、亂暴な、下品な言葉の用材からでも、どんなに婉曲な、こまやかな、氣品の高い詩の建造物でもが出来上るといふことを——何よりも先づ此の逆説的な眞實を、痛快な程度にまで彼は證據立ててゐる。

彼は最も崇高な悦びをも、最も奥深い哀みや恐怖をも、否一切の物を悉く物質化し、肉體化し、感覺化して歌つて見せる。すなはちその詩の中では、女性的な柔らかな臀部の曲線が、詩人の舌の上に味覺されてゐる。朽敗した靈魂の、または『神』の屍臭が、詩人を息

づまらせてゐる。どんな男性よりも、どんな女性よりも、人間らしい悪魔の安らかな寢息が、詩人の眠りをさまたけてゐる。地獄の入口から吹いて来る青白い風の冷たさが、冒險好きな彼の心臓の血を湧き立たせてゐる。

いゝ加減と、生ぬるさとに對して、生れながらの敵であるらしいこの作者の詩は、センチメンタルな廉つほい『人間性』や人道やを、單に無視するばかりでなく、わざわざ寸裂し、粉碎し、蹂躪しないではゐられないほどに、叛逆的革命的であり、嚴肅な意味に悪魔主義的であり、そしてその限りに於てかなり新らしい、道德的な、或

は超道徳的な熱情に燃え立つてゐる。

一九二三年三月九日

生田長江

目次

新らしき夜

尻つほ	三頁
私が描かうとする繪	四頁
女人の焼鳥	六頁
處女への言葉	七頁
無題	一一頁
泣き猿	一二頁

掏 摸	一四頁
おしやれにならうとした動機	一六頁
酔へる情欲	一七頁
私	一九頁
暗黒の刺客	二二頁
靈と肉	二三頁
熱 狂	二五頁
反 逆	二七頁
第三卷まで	二九頁
衝 動	三二頁

正午時の憂鬱

眼 鏡	三七頁
街 上	三八頁
長崎人形	三九頁
おしやく	四〇頁
銀 座	四二頁
おしけさん	四三頁
酒 場	四三頁
五 月	四五頁

借 金……………四八頁
ある日の王様……………五一頁

揺 籃

しゆろの花……………六七頁
草に寝て……………七〇頁
涙……………七三頁
初秋の村……………七五頁
春……………八二頁

装 幀

牧 壽 雄 氏

新 ら し き 夜

—自一九二三年 至一九三三年—

尻つぼ

おゝ、肉體といふ字をこの世で

いちばん高いところへ祭れよ

おゝ、靈魂といふ字をこの世で

火葬の三等にたのんで来い

馬鹿！ 人間には尻つぼがあるんだ。

私が描かうとする繪

私が描かうとする美しい繪は

かの狸々の姿である

若い□を

その足元に□□□□□

まつ赤に

まつ赤に

おゝ火柱のごとく つゝ立つ
彼の狸々の姿である。

女人の焼鳥

あゝわが眞紅なる緞子のしとねの
まはりに九人の、若き美しき女人を並べよ
輝かせよ

燃ゆるしこぎで、つなける花笠のそのごとく
申でつらぬく、彼の焼鳥のそのごとくに。

處女への言葉

おゝきぬえよ

汝の裸體はわが全魂を震駭せしめる

おどれ！その□を□□□□□

薔薇色にうるめる□□□□□せよ

しかり きぬえよ

汝は美しき花であるか

わが淫欲のためにのみ咲く

牡丹——緋牡丹の花であるか

否々 きぬえよ

汝の鱗は銀白色なり

汝の瞳は、青き紫の寶石なり

しかして汝の、尻つほは華麗なる花扇である

泣くをやめよ 汝きぬえよ

なにが汝をさみしくさすのか

見よ！ わが逞ましき□□と□□

これは汝のために作られた生命である

さあ来い！ きぬえよ

汝！ 美しき處女に歡樂の花火を揚げやう

汝に聖典——シャクチの宮殿に於けるすばらしき祭りを見せやう

おゝ 汝きぬえよ

汝の裸體はわが全魂を震駭せしめる

おどれ！汝の、をけよ

ほてほてにせよ。

無 題

ピストルで打たれたやうに俺の心が
打たれる素敵なたはるないか

クレオパトラのやうな女が
もしゐるなら

俺はそいつの鼻糞だけでも貰ひにゆく。

泣き猿

今日のひろすぎに

銀座通りで

實にすばらしい女を見た

あんな女を

知つてる男は

神様よりも幸福だ

ぐらぐらッ……と眩暈がしたとき

もうその女はゐなかつたが

私は泣き猿のやうだつた。

す
り

すりをやる時の

気持ち——

ざいつと横眼で

女をみる

——隣りの男の、インパネスの袖の下から

女をみる

すてきだー

べつびんだー

快感だ！

——電車はいつまでも走ってる。

おしやれにならうとした動機

今朝みた犬の□□□□□□——

おゝ 俺はコール天の素晴らしい服を一つ作つて
馬鹿におしやれを試してみたくなつた

おしやれにならう

素敵なおしやれに。

酔へる情欲

まつ黒い表紙に金文字

——そのやうに

お花さん

貴女の束髪にさゝれたピンが光るんです

よつばらつた、僕の眼玉へ光るんです

むしやうに、ちくちく、なんだか氣ちがひに光るんです

で、お花さん

ピンを抜いて、貴女が寝るときは何時でせう。

私

私はまつ黒い

ぬすどでありたい

やみ夜に

やみ夜に

まつ青な刃をかざして

めくらめつほう

走つてみたいよ

一度でいいのだ

たつた一度で

闇夜に

□□！

——□□□の悲鳴が聞きたい。

暗黒の刺客

黒い太陽のするどい光りで

私はまつ青な刃をみる

黒い月のするどい明りで

私はまつ赤な叫びをきく

おゝ暗黒の刺客！ 刺客！

お前——暗黒の刺客たれ。

靈 と 肉

僕は□□□□と□□□□との

『肉』を食ひたいと思つてゐる

しかしキリストと親鸞との

『靈』を飲まうとは思つてない

たましひではない

からだと體の戦ひだ！

熱 狂

熱狂——

おゝ何といふ必死の力だ！

熱狂せよ

旗手は赤旗を握るしゆんかん

すりは袂を狙ふしゆんかん

乞食は自動車をつめるしゆんかん

そして梅毒の□□□□は

男を□□□□しゆんかんに

おゝ、死を期して熱狂せよ。

反 逆

數丈になほあまる

監獄の赤い煉瓦の壁をまつすぐにのほるとかけよ

お前の恐ろしい凄惨な眼よ

お前の白刃と光らす鱗よ

誰を呪ひ、誰を恨んで、このまつびるまにお前は何處へのほつて行くのか
數丈になほあまる

監獄の赤い煉瓦の壁をまつすぐにのほるとかけよ。

第三卷まで

第一卷では

アナクレオンの愛唱家が

キッスの口つきをしてまだ見ぬ戀人にこがれる風姿……

第二卷では

マリネツチの崇拜者が

人の妻君を抱いて踊つて、遂々二人が鋭角三角形の火になる光景……

第三卷では

ダダのダダダダ、ダダの詩人が

小笠原流結婚式の席へ飛び出て

素敵な放屁の前の『く』の字の『く』の字の腰つき

しかし第四第五の映書は

□□□□ 血！血！煙りで

實寫は明日まで許可されまい。

衝動 (その一)

土瓶がある

こゝに古くさい土瓶がある

土瓶をぶちわれ!

明日の不自由を考へるな。

衝動 (その二)

松の木がある

向ふの丘に松の木がある

高い松の木!

おゝ あの松の木を逆さにしてやれ。

正午時の憂鬱

—自一九二七年 至一九二九年—

眼
鏡

あの無恰好な乗合自転車の横腹めは
妊娠九ヶ月がたしかだろう
しかし、あんなに走つてゐるから
どうも不思議だ

眼鏡をなほさう……

街 上

巴里の夜の生殖氣分で

散歩だ？ 生意氣な洋服女よ

生まれ！ どうしても氣に食はないから

お前に逆立ちを要求する。

長崎人形

まるまけの

若い女は

まるで長崎人形です

まけがこつくり——敷石へ落ちてほかんと割れました。

おしやく

おしやくの口紅は

たいへん可愛い

だけど袂の、芋めがあんまり重たいので

かつほこ かつほこ

飛べないです。

銀座

このシヨウ・ウ井ンドウの眞珠はどうして

巡査の眼よりも光らぬのか。

おしげさん

そば屋のおしげさんは評判娘

前の常設活動寫眞の、主任辯士とあやしいです

だげどやつぱり、僕はおしげさんが大好きです

おしげさんが呉れる『うどん』は

實際十錢では安すぎます。

酒 場

『大關』の菰樽の

かけにそつと立つてる娘は

おめみえらしい

白いエプロンの先をみてゐる

うなじが馬鹿に白くて可愛い、

だが、あの、□□の曲線めは

どうしても何處かにいゝひとが居りそうだ。

五
月

五月が来た

壯健な五月！

山を仰げば

山は緑青の虹でのたうち

原をみやれば

原は孔雀の羽絞で輝く

ましてまつ赤な太陽と

ねばい紫の空気のおかけで

ぐんぐん發育してゆく

動物の肉體！

見よ！ 人でも馬でも牛でも豚でも

すべての女性は

彼女の□□の□□□□にいら立ち

すべての男性は

わき立つ□□の□□に苦しみ

七面鳥の重たい首さへ

たえず□□の繪具でぬられる

おゝ五月 五月

濃き情欲の波立つ五月よ。

借金

僕は今日、あんまり借金で苦しいので
ふつと十圓——金貨を吞んでみたかった
それが咽喉から
胃の腑へくる
それから大便と一緒に出る
そこで新聞紙を敷いといて

その大便を受けるとする
すると十圓がお出しました
すてきに輝いてお出しました
めつほうくさくしてお出しました
だがすぐそれを
金貸しめに
『十圓只今お返しする』
そう言ひながらのづけてやる

そんな芝居を考へた。

ある日の王様

太陽の光りがきらきら

小鳥の歌がやかましいので

王様は只今おめざめで御座います

王様はお顔をお洗ひで御座います

ぶらぶらと水でお顔を

しかし王様は大變元氣でゐらつしやいます

めしを食はふか

王様が自分で御自分に申されます

この大根はすこしかたいな

しかし茶漬けで、さらさら〜お上りです

王様はお召し換えです

ペラペラの寝巻きの浴衣をおぬぎになります

コール天の青い洋服、靴—ブルドッグをお穿きになります

王様はいよ〜お出まして御座います

おともは尾行のスパイと申して

いつでも王様のお尻へ食つついて歩きます

王様は銀座をおひろいで御座います

カツフェ・パウリスタと申す御殿で

一杯五錢のコーヒーを

如何にもおいしそうにお飲みになります

その時おともは御殿の御門で

はるかに王様を守護して居ります

おともにも飲めと王様はお言ひになります

しかしおともは御遠慮申して、いつまでも御門の外に待つとります

王様はとある新聞社へお立寄りで御座います

こないだの書きもの料が頂きたい

そこで王様の手には十圓——金貨がびかくと輝きます

『よつて家来よ、金が出来たぞ

さてこの次ぎは何處へ行かうな』

すると王様の前でおともが

へへへッ……と、變に唇をゆがめて頭を掻きあけます

王様は電車へお乗りで御座います

おともも王様に負けないつもりで、ひらりと急いで飛び乗ります

しかし王様は大變御機嫌でゐらつしやいます

王様は雷門と申すところで

ゆう／＼電車をおすてになります

『金ずしはうまいよ／＼』王様ははつくりおすしを

五つもおつまみで御座います

王様はゆつくりお歩きで御座います

王様を迎へる樂隊が鳴り出します

まつ赤な、まつ青な、旗が王様にひらく／＼笑つて

タララ タララ ラツラツラツ……女が大勢で舞踏をやります

王様はやつぱりお歩きで御座います

小さい露路から露路をぐるくおまはりです

そして六區とか申す御殿へ——王様は莞々しながらお這入りです

王様はよたくお歩きで御座います

するとその時、三千人の姪がいつせいに申されます

『ちよいと王様、お髭の王様、ちよつちよつ……こゝまでゐらつしやい』

王様は益々お欣びで御座います

『あらッ！王様がゐらつしやつたわ』

竹の格子の中から一人の——いちばん美しい姪が大声で申されます

そこで王様は姪についで、二階へお上りで御座います

赤いメリンスの大きい坐布圍——王座へおすはりで御座います

『どうぞや、その後は』

王様は姪に向つて申されます

『ずるぶん王様をお待ちしてたわ』

姤は王様にあまへて、それから、煙草をすうツ……とお吸ひになります

王様はお酒を召します

それから□□□□で御座います

それでも御家来だけはそのへんをぶらくしてゐて

しかも王様のお身が大事と、少しも御油断なさいません

王様はすてきな夢を御覧になります

まつ赤な、まつ白な、□□が□□

□□□、□□□□□、□□□□いゝ夢で御座います

王様はかねくそうした、夢がお好きで御座います

一つの夢が醒めるとまたしてもその夢を、みたいくと仰言います

姤も王様に負けず劣らず夢がみたいと仰言います

やがて夕暮で御座います

王様と姪のお部屋に、まつ赤な電燈が輝きます

遠くの方から、トーフ トーフ……と

ラッパの音が近づきます

王様はいよくお歸りで御座います

姪は王様のお手を握つて

『どうぞお近いうちにね、いらんとさ』

そこで王様に吸ひつけ煙草の、おいしい贈物をなさいます

再び王様は電車へお乗りで御座います

おともも王様に負けないつもりで、急いでその電車へ飛び乗ります

しかし王様は大變疲れて、なんだかほんやりで御座います。

王様はやがて自分の、お城へお歸りで御座います

王様のお城は七軒長屋のまん中

お部屋は三疊でまつ暗です

破れた障子の穴から風めが、絶えずスウスウ吹きつけます

王様はそこでこわれた、椅子にお掛けて御座います
しかしいつまでもほかんとしてゐて、何にもお仕事をなさいません
けれども御家來はやつぱり王様のお部屋の外から
しよつちゆう王様のお機嫌如何にと案じて居ります。

搖

籃

—自一九二〇年 至一九二二年—

しゆろの花

しゆろの花

しゆろの花

お前の乳房はふくよかな

お加代の乳房に

ほんに似る

とはいふものの

しゆろの花

お加代の乳房は

ぬくいけど

お前はつめたい

花だもの

つめたい花が

咲いたとて

昔の戀がかへるかよ

なんでお前を

吸はりよかよ

にくいこの花

しゆろの花。

草に寝て

草に寝て

牛の乳房を陽にすかし

空渡りゆく駒鳥の

歌をまうえに聞いたけど

あゝ、くづれた過去には

今はさみしい昔がたまつた

たはむれた

牛の綱をそつと曳いたら

牛は静かにこちらを向いたが

やがて再び

鼻をも眼をも草にうつめた

春はくる

春はすぎる

あれきりあのひとに逢はないで
他人となるのか

さみしい――

涙

涙をこらへて

ぢつと

仰ぐと

向ふも涙を

ぢつと

こらへて

あゝいつまでも

ふるへてゐる

月一

初秋の村

すべてが愉悦と清澄と

またほのかなる幽韻と

自然の恵みは、實に素晴らしく限りない

悲しむものは後に残れ

私は歡びに浸らうとする

待ちかねた初秋

私の好きな初秋

あらゆるものが今歌ふ――

すゞきは丘に青くなびき

野菊の花は、水量ゆたかな小川の面に

すべる水馬とたがひに影を寫してよろこび

また、池栗の葉で一杯につつまれた

山峽沼の静かな空気を

たえず――かなくくの聲がゆるがす

木挽は山に、のびやかな唄を歌ひ

かほり高い鋸屑のかたはら

まつ黒にいぶつた土瓶は、音もなく一條の湯氣を立ちのほらせ

栃葉の匂ひがひそかに流れる

木立の奥には

風もないに――はらくと栗の實が散る

あゝ、澄みきつた鳴子の音が
だしぬけに

ひろい稲田の穂波をゆらして

瑠璃色空に高くひびけば

おどろく雀ら——遠く彼方の鉞をめがけて散らばり

と、稲田につゞく土手の向ふに

みよ！ はりきつた一つの白帆が

ゆうくくと川上へのほる

こなたの道路をすべる自転車

—— 繭買ひ商人の古びた自転車

つゞいて鐵輪の音丘にひびかせ

急ぎ馳せゆく、乗合馬車の若い馭者が持つ誇り

愛する馬の大きい蹄は

昨日新らしく打ちかへて

とうくと吹く彼れのラツバに

見よ！ 道端の小さい茶店の

娘の心は反響する

あゝ、すべてが愉悅と清澄

またほのかなる幽韻と

自然の恵みは、實にすばらしく限りない

悲しむものは後に残れ

私は歡びに浸らうとする

待ちかねた初秋

私の好きな初秋

あらゆるものが今歌ふ――

春

私は知つて居ります

はつきりと知つて居ります

貴女の瞳の底にひそんでゐるもの

貴女の唇に燃えてゐるもの

それが、その正體が何であるかを

けれども貴女は

私にとつて路傍の人です

私も貴女に、今はちめて向ひ合せに

この電車の中に腰掛けてゐる


みしらぬ青年にすぎますまい

しかし私は知つて居ります

はつきりと知つて居ります

私の瞳の底にひそんでゐるもの
 私の唇に燃えてゐるもの
 それが、その正體が何であるかを。

この書の中は、
 著者の文が、
 著者の心で書かれたものである。
 著者の心で書かれたものである。

版權所有		大正十二年三月十五日印刷 大正十二年三月十八日發行 定價 一圓
		
發行所 東京市神田區表神保町十番地 自 然 社 振替東京三五五一〇番	著 作 者 松 本 淳 三 <small>東京市神田區表神保町十番地</small>	發 行 者 梅 津 英 吉 <small>東京市芝罘愛宕下町三丁目一番地</small>
印 刷 所 愛 友 舍		

